Café des 三浦一族 open

Menu　第２９回

三浦貞連と三浦高継

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館　郷土資料室）

鎌倉時代末から室町時代初期にかけて活躍した三浦一族に三浦貞連(さだつら)と高継という人物がいます。今号では、この2人について紹介します。

建武2年（1335）7月、北条高時の遺児、時行の挙兵により、鎌倉は一時時行方に占拠される事態となりました。これにより、鎌倉を追われた足利直義を救援するため、兄の尊氏は京から東下し、時行勢を討ち果たします。後醍醐天皇は尊氏に帰還命令を出しますが、尊氏はこれに応じませんでした。建武政権への反意とみた後醍醐天皇は、新田義貞らに尊氏討伐を命じ、義貞の軍勢は京から鎌倉に向け、出陣しました。双方の軍勢は、箱根・竹ノ下（静岡県駿東郡小山町）で合戦となりますが、尊氏方が勝利します。この一連の合戦で、貞連は、「侍所」として、尊氏方に馳せ参じた武士らの戦いぶりを確認する役目を果たしました。侍所は、尊氏方の軍勢を統括する要職であり、貞連は、尊氏の下で重責を担う存在だったのです。その後、尊氏とともに貞連は上洛し、侍所として、武士らの戦功確認、首実検の監督などの職責を果たしましたが、建武3年（1336）正月27日、義貞勢等との賀茂河原の戦いにおいて、討死しました。

貞連には、横須賀と関わり深い一面もありました。元亨３年（1323）、禅僧の夢窓疎石は、自身が横須賀に構えた泊船庵を離れ、上総国の退耕庵へと移りましたが、その際、泊船庵の「檀那」であった「三浦安芸前司貞連」に和歌を送っています。ここでの「檀那」とは、泊船庵の庇護者として解釈されることから、「三浦安芸前司貞連」こそ、泊船庵が所在した横須賀郷（横須賀米海軍基地から京急逸見駅及び汐入駅周辺一帯）の領主であり、先述の侍所の貞連と同一人物だったのではないかと考えられています。さらに、貞連の系譜には横須賀氏を称する一族がいたことがわかっています。史料が少なく、断片的ではあるものの、戦国時代も横須賀氏がこの地を押さえていたことが確認できます。三浦一族ゆかりの地といえば、鎌倉時代、三浦惣領家が本拠とした大矢部が想起されますが、その後の室町～戦国時代も含め、ほぼ中世全体にわたり、一族による伝領が認められる地は、横須賀市内では横須賀郷だけであることから、ここもまた三浦一族ゆかりの地といえるでしょう。

泊船庵があったとされる米海軍基地内

さて、貞連は、建武3年に死没しましたが、高継は暦応2年（1339）に没したため、貞連亡き後の一族の動向を確認することができます。高継は、中先代の乱で尊氏方に属して以後（詳細は、まなびかんニュース2024年12月号を参照）、尊氏のもとで、行動を共にしていきます。尊氏は、先述のとおり、箱根・竹ノ下の合戦以後、上洛を果たしますが、その後、後醍醐天皇方の軍勢に敗れ、九州に逃れていきます。しかし、尊氏は、天皇方に与していた九州の豪族菊池氏を破り、再び体制を整えて京に向け進軍していきます。建武3年4月27日、尊氏は、九州から周防国笠戸(山口県下松市)に到達し、高継に対して備中・美作両国（岡山県）の軍勢を率いて美作の敵勢を討ち果たすように命じました。これは、当時、高継が両国の武士らを統括する立場にあったことを示しています。その後、同年5月25日、新田義貞・楠木正成等が大敗を喫する湊川の戦いにおいて、高継は、直義が率いる大手軍の一員として戦いに加わり、尊氏勢の一翼を担いました。その後、建武4年（1337）4月26日、肥後国の地頭が、足利方の陣に参じたことを示す着到状を提出した際、これに高継は自らの証判を加えています。他史料から、高継は貞連と同様、侍所だったことが確認されており、彼もまた尊氏のもとで軍勢を統括する存在だったのです。

また、高継は三浦半島と関わりの深い人物でもありました。中先代の乱後、尊氏から下された所領安堵状の内容によれば、その所領は全国に広がっていたことがわかりますが、なかでも三浦半島については、「三崎・松和・金田・菊名・網代・諸石名」（諸磯）などが明記されていることから、高継は主に三浦半島南端部（三浦市域）を拠点としていたことが窺えます。

今号では、貞連と高継を紹介しましたが、その共通点は、いずれも初期室町幕府の侍所をつとめ、尊氏を支えた存在であったことです。ほぼ同時期、尊氏のもとで重責を担った2人の三浦一族の存在がありました。

参考文献：『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』（横須賀市、2012 年）